

1 東京都・大阪市中央卸売市場の需給動向(令和6年6月)

野菜振興部 調査情報部

【要約】

- 東京都中央卸売市場における野菜の入荷は、入荷量は10万7359トン、前年同月比92.6%、価格は1キログラム当たり282円、同106.0%となった(表1)。
- 大阪市中央卸売市場における野菜の入荷は、入荷量は3万5251トン、前年同月比95.2%、価格は1キログラム当たり256円、同108.9%となった(表3)。
- 8月の東北産や北海道産は、安定した天候で前年を上回る出荷が予想される。梅雨入りが大幅に遅れて高原野菜が順調に入荷、価格は4、5月の高値の反動もあり6月後半はやや低迷したものの、平年並みの落ち着いた推移が予想される。

(1) 気象概況

上旬は、梅雨前線が日本の南で停滞し、東・西日本を中心に冷涼な高気圧に覆われることが多かったため、旬平均気温は、西日本で低く、北日本と東日本では平年並だった。旬間日照時間は、東・西日本で多かった一方、沖縄・奄美で少なく、北日本では平年並だった。降水量は、期間の終わりに梅雨前線が停滞し、前線上の低気圧の影響などで沖縄・奄美、九州南部や四国では大雨となった所があったが全国的に平年並だった。九州南部で8日頃、四国地方では9日頃に梅雨入りした。

中旬は、梅雨前線が南西諸島付近に停滞することが多く、沖縄・奄美では、旬降水量がかなり多かった。旬平均気温は、全国的に晴れて暖かい空気に覆われ、北・東・西日本でかなり高く、沖縄・奄美では平年並だった。特に北日本の旬平均気温平年差は+3.5℃で、1946年の統計開始以降、6月中旬として1位の高温となった。旬間日照時間は、北・東・西日本では多かったが、沖縄・奄美はかなり少なかった。東日本日本海側の旬間日照時間平年比は193%で、1961年の統計開始以降、6月中旬として1位の多照となった。旬降水量は、この時期としては移動性高気圧が本州付近を覆うことが多く、北日本太平洋側と東日本日本海側でかなり少なく、北日本日本海側と西日本では平年並だ

った。東日本太平洋側では多かった。九州北部地方で17日頃に梅雨入りし、沖縄地方では20日頃に梅雨明けした。

下旬は、梅雨前線の活動が活発となり、特に21日は鹿児島県で、28日は静岡県で線状降水帯が発生するなど、東・西日本太平洋側を中心に大雨となった。関東甲信地方、東海地方、近畿地方では21日頃、北陸地方、中国地方では22日頃、東北地方では23日頃に梅雨入りし、奄美地方では23日頃に梅雨明けした。

旬平均気温は、北日本と沖縄・奄美でかなり高く、東・西日本で高かった。特に、太平洋高気圧に覆われやすかった沖縄・奄美の旬平均気温平年差は+1.3℃で、1946年の統計開始以降、6月下旬として1位の高温となった。

旬間日照時間は、西日本でかなり少なく、北日本日本海側と東日本では平年並だった。北日本太平洋側では多く、沖縄・奄美では、かなり多かった。

旬降水量は、東日本太平洋側でかなり多く、北・東日本日本海側と西日本で多かったが、北日本太平洋側では平年並だった。

旬別の平均気温、降水量、日照時間は以下の通り(図1)。

図1 気象概況

	平均気温			降水量			日照時間		
	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬
北日本					日本海側	日本海側			日本海側
東日本					日本海側				
西日本									

資料：気象庁「6月の天候」

1 平年を上回る水準			
2 平年並み			
3 平年を下回る水準			

(2) 東京都中央卸売市場

東京都中央卸売市場における野菜の入荷は、

入荷量は10万7359トン、前年同月比92.6%、価格は1キログラム当たり282円、同106.0%となった(表1)。

表1 東京都中央卸売市場の動向(6月速報)

品目	入荷量(t)	前年比(%)	平年比(%)	価格(円/kg)	前年比(%)	平年比(%)	価格(円/kg)の推移		
							上旬	中旬	下旬
野菜総量	107,359	92.6	89.7	282	106.0	108.8	298	288	259
だいこん	6,521	95.1	95.6	92	100.0	94.2	99	88	87
にんじん	5,240	83.8	85.7	226	161.4	159.0	226	230	221
はくさい	5,481	88.5	84.7	69	106.2	103.5	67	71	69
キャベツ類	14,451	101.3	90.3	84	88.4	98.1	98	78	73
ほうれんそう	1,315	100.8	100.6	462	94.1	98.8	482	457	443
ねぎ	3,422	94.5	94.0	370	84.7	90.6	391	366	350
レタス類	7,594	92.0	94.3	126	92.0	94.8	130	127	122
きゅうり	6,509	96.9	90.9	226	79.0	85.3	249	213	214
なす	2,993	98.6	93.1	391	102.1	101.8	461	415	309
トマト	7,049	95.4	91.0	335	113.9	115.8	350	354	302
ピーマン	2,340	93.4	96.9	456	104.6	102.2	528	433	394
さといも	96	106.7	66.7	554	83.4	111.5	549	555	562
ばれいしょ	5,362	75.3	73.1	312	203.9	181.0	309	332	290
たまねぎ	7,462	77.8	76.9	162	168.8	143.9	140	170	180

資料：東京青果物情報センター「青果物流通月報・旬報」

注1：平年比は過去5カ年平均との比較。

注2：豊洲、大田、豊島、淀橋、葛西、北足立、板橋、世田谷、多摩ニュータウンの9市場のデータである。

根菜類は、にんじんの価格が、絶対数の不足から高値が続き、前年を6割強上回り、平年を6割弱上回った(図2)。

葉茎菜類は、キャベツの価格が高めに推移した上旬から中旬以降下げ、高めに推移した前年を1割以上下回り、平年をわずかに下回った(図3)。

果菜類は、トマトの価格が中旬以降に下がったものの、前年、平年ともに1割以上上回った(図4)。

土物類は、ばれいしょの価格が絶対数の不足から大幅な高値が続き、前年の2倍強の価格となり、平年を8割以上上回った(図5)。

なお、品目別の詳細については表2の通り。

図2 にんじんの入荷量と卸売価格の推移

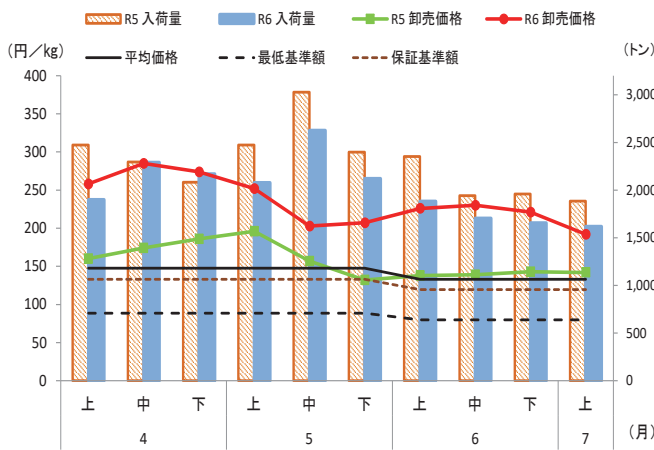


図3 キャベツの入荷量と卸売価格の推移

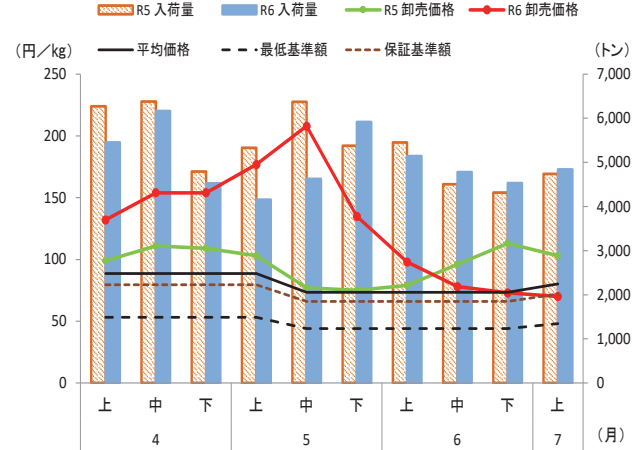


図4 トマトの入荷量と卸売価格の推移

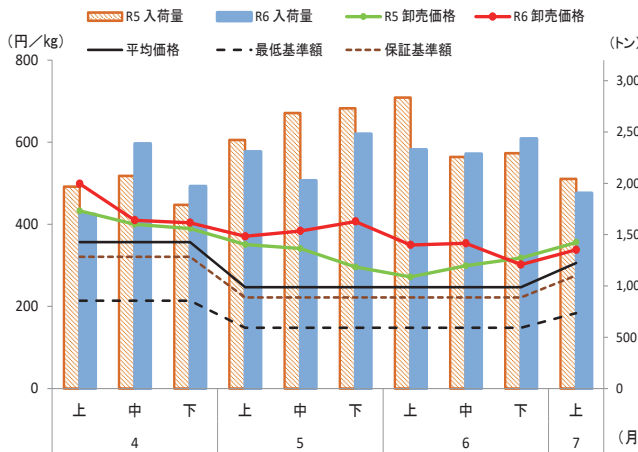
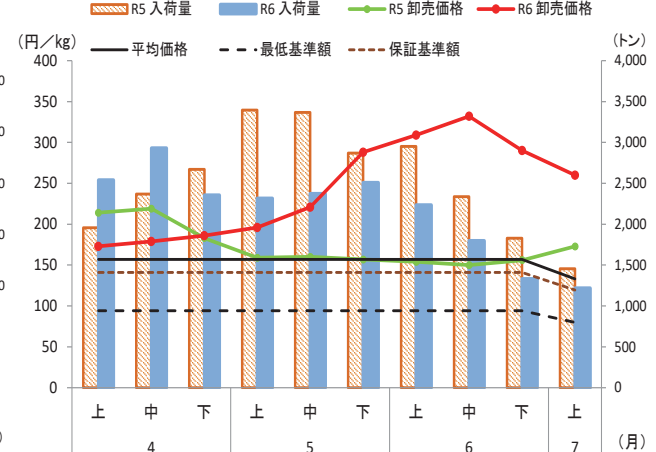


図5 ばれいしょの入荷量と卸売価格の推移







資料：東京青果物情報センター「青果物流通旬報」

- ※1 卸売価格とは、東京都中央卸売市場の平均卸売価格で、平均価格、保証基準額および最低基準額とは、関東ブロックにおける価格である。
- ※2 平均価格とは、指定野菜価格安定対策事業（以下「事業」という）における、過去6カ年の卸売市場を平均した価格を基に物価指数等を加味した価格である。
- ※3 事業における価格差補給交付金は、平均販売価額（出荷された野菜の旬別およびブロック別の平均価額）が保証基準額を下回った場合に交付されるため、上記の各表で卸売価格が保証基準額を下回ったからといって、交付されるとは限らない。

表2 品目別入荷量・価格の動向（東京都中央卸売市場）

類別	品目	6月の入荷量・価格の動向
根菜類	だいこん 	青森産を中心に千葉産などの入荷となった。青森産の作付面積は前年並みで、一部圃場で生理障害などが散見されるものの生育はおおむね順調であった。千葉産の作付面積は前年並みで、生育は遅延から回復し順調であった。総入荷量は前年並みであった前年をわずかに下回った。 価格は中旬以降下げ、やや安めに推移した前年並みとなり、平年をやや下回った。
	にんじん 	千葉産が中心の入荷であった。作付面積は前年並みであり、播種期の干ばつと2~3月の低温と曇雨天で一部生育が遅延したが、その後の気温上昇により生産は回復した。中旬以降の出荷は漸減した。後続の北海道産、青森産については一部欠株や生育不良が見られるもののおおむね順調であった。中国産の輸入は前年を9割以上上回った。総入荷量は前年並みであった前年を大幅に下回った。 価格は絶対数の不足から堅調な動きが続き、前年を6割強上回り、平年を6割弱上回った。
葉茎菜類	はくさい 	長野産中心の入荷となった。作付面積は前年並みで、若干の定植遅れが見られたものの、4月の天候に恵まれ生育は順調であった。茨城産の切り上がりは平年より早かった。総入荷量は、前年、平年ともかなり大きく下回った。 価格は安定した動きとなり、前年をかなりの程度上回り、平年をやや上回った。
	キャベツ類 	千葉産を中心に茨城産、群馬産などが入荷した。千葉産の作付面積は前年並みで、温暖な天候に恵まれ生育は前進し、やや前倒して出荷された。茨城産の作付面積は前年並みで3月の低温の影響で生育はやや落ち着いたものの、前進傾向で下旬に向け漸減した。群馬産の作付面積は前年並みで、定植は順調に進んでいたが、5月の降霜と強風で一時生育が停滞した。その後の定期的な降雨により生育は回復しおおむね順調であった。総入荷量は、少なかった前年をわずかに上回り、平年を1割弱下回った。 価格は高めに推移した上旬から中旬以降下げ、高めに推移した前年を1割以上下回り、平年をわずかに下回った。
	ほうれんそう 	群馬産を中心に茨城産、栃木産など関東産のハウス物中心の入荷であった。群馬産の作付面積は前年並みであり、3月の低温・多雨により生育は不安定であった。茨城産の作付面積は前年並みで、気温に恵まれ生育は全体として前進傾向であった。栃木産の作付面積は前年並みで生育は順調であった。総入荷量は前年並みであった前年をわずかに上回った。 価格は平坦地の品質が不安定となった中旬以降下げ、やや高めに推移した前年をやや下回り、平年をわずかに下回った。
	ねぎ 	茨城産を中心に千葉産の入荷があった。茨城産の作付面積は前年並みで、3月の低温・多雨により生育が遅延し、太りが悪く細物傾向であった。千葉産の作付面積は前年並みで、病虫害は散見されるものの、定期的な降雨と気温に恵まれ、生育はおおむね順調であった。総入荷量は前年をやや下回り、平年をかなりの程度下回った。 中旬以降に価格は下がり、高めに推移した前年を1割以上下回り、平年を1割弱下回った。
	レタス類 	長野産中心の入荷であった。作付面積は前年並みで、3月の天候の影響により生育はやや遅れていたが、4月の気温上昇と定期的な降雨で回復傾向となった。総入荷量は前年をかなりの程度下回り、平年をやや下回った。 中旬以降に価格は下がり、前年をかなりの程度下回り、平年をやや下回った。
	果菜類	きゅうり 
	なす 	高知産を中心に群馬産など関東産の入荷があった。高知産の作付面積は前年並みで、生育はおおむね順調も4~5月上旬の天候不順の影響で収量は前年よりやや少なかった。虫害は少なかったが、一部病害が散見された。群馬産の作付面積は前年をやや上回り、生育はおおむね順調だが虫害が散見された。総入荷量は少なめに推移した前年をわずかに下回り、平年をかなりの程度下回った。 価格は中旬以降に下げたものの、前年、平年ともわずかに上回った。
	トマト 	栃木産、熊本産を中心に愛知産などの入荷があった。栃木産の作付面積は前年並みで、生育はおおむね順調であり、収穫終盤であるが肥大は回復してきている。やや黄変果が散見される。熊本産の作付面積は前年並みで、4月下旬の天候不順の影響で一部病害が散見されたが、おおむね順調であった。愛知産の作付面積は前年並みで、生育はおおむね順調であり終盤を迎えた。総入荷量は少なめに推移した前年をやや下回り、平年を1割程度下回った。 価格は中旬以降に下げたものの、前年、平年ともかなり大きく上回った。

	 ピーマン	<p>茨城産中心の入荷となった。作付面積は前年をやや下回り、生育は低温の影響で遅延し、若干の着果不良が散見されたものの、その後の天候で回復した。後続の岩手産は一部虫害が散見されるもののおおむね順調であった。総入荷量は多かった前年をかなりの程度下回り、平年をやや下回った。</p> <p>価格は中旬以降に下げたものの、前年をやや上回り、平年をわずかに上回った。</p>
土物類	 さといも	<p>鹿児島産中心の入荷となった。作付面積は前年並みで、天候不順の影響で作業の遅れが見られた。天候の影響で生育、収穫作業にかなりのばらつきが生じている。中国産の輸入は前年を大きく上回った。総入荷量は大幅に少なかった前年をかなりの程度上回り、平年を3割以上下回った。</p> <p>価格は絶対数不足から堅調な動きとなり、大幅に高めに推移した前年を2割近く下回り、平年を1割以上上回った。</p>
	 ばれいしょ	<p>長崎産を中心に静岡産、茨城産などの入荷があった。長崎産の作付面積は前年並みで、生育初期からの天候不順の影響で玉つきが少なかった。静岡産の作付面積は前年を下回り、温暖な気候と降雨の影響でやや徒長気味となり、さらに3月中旬の冷え込みにより生育が遅れた。茨城産の作付面積は前年並みで、生育は順調であった。総入荷量は、少なめに推移した前年を2割以上下回り、平年を3割程度下回った。</p> <p>価格は、絶対数の不足から大幅な高値が続き、前年の2倍強上回り、平年を8割以上上回った。</p>
	 たまねぎ	<p>兵庫産、佐賀産中心の入荷があった。兵庫産の作付面積は前年並みで、2~4月にかけての集中豪雨によって病害が散見された。佐賀産の作付面積は前年並みで、4月の断続的な降雨で病害の発生が散見された。天候不順の影響もあり作柄はやや良くない。中国産の輸入は前年を8割近く上回っている。総入荷量は前年、平年とも2割以上下回った。</p> <p>佐賀産が減少した中旬以降に価格は上がり、安めに推移した前年を7割近く上回り、平年を4割以上上回った。</p>

(執筆者：東京シティ青果株式会社 平田 実)

(3) 大阪市中央卸売市場

大阪市中央卸売市場における野菜の入荷は、入荷量は3万5251トン、前年同月比95.2%、

価格は1キログラム当たり256円、同108.9%となった(表3)。

品目別の詳細については表4の通り。

表3 大阪市中央卸売市場の動向(6月速報)

品目	入荷量(t)	前年比(%)	平年比(%)	価格(円/kg)	前年比(%)	平年比(%)	価格(円/kg)の推移		
							上旬	中旬	下旬
野菜総量	35,251	95.2	94.5	256	108.9	111.6	267	259	242
だいこん	1,854	89.2	80.9	105	105.0	101.5	120	101	96
にんじん	2,239	89.4	84.6	221	176.8	183.3	248	218	201
はくさい	3,129	95.7	98.1	78	104.0	102.5	82	76	75
キャベツ類	4,783	112.0	110.8	85	81.7	90.3	97	77	78
ほうれんそう	426	95.1	90.3	604	99.5	102.5	606	601	606
ねぎ	592	99.2	109.0	450	89.1	93.2	489	438	419
レタス類	1,974	95.3	85.1	125	89.3	95.1	124	126	125
きゅうり	1,556	94.2	94.3	230	82.1	91.1	243	221	228
なす	1,174	99.8	105.1	366	104.9	108.8	409	381	314
トマト	2,059	99.7	103.3	344	113.5	114.9	358	358	319
ピーマン	697	117.6	119.6	386	94.4	101.5	448	362	347
さといも	18	101.7	63.5	630	92.2	119.7	630	622	639
ばれいしょ	2,072	78.9	73.6	288	211.8	184.2	283	294	287
たまねぎ	4,159	91.7	99.7	165	171.9	144.6	144	173	177

資料：農林水産省「青果物卸売市場調査」

注1：平年比は過去5カ年平均との比較。

注2：大阪本場および大阪東部市場のデータである。

表4 品目別入荷量・価格の動向（大阪市中央卸売市場）

類別	品目	6月の入荷量・価格の動向
根菜類	だいこん 	<p>北海道産と青森産が主体となり、月の後半は岐阜産の入荷もあった。九州の産地は上旬に、和歌山産は中旬に切り上がった。各産地とも生育は順調で産地の出荷量も潤沢であったが、青森産が現地価格の高騰により単価が合わず、入荷量減となった。青森産は旬を追うごとに入荷量は増えたものの、月間では前年の半分以下となり、平年をかなりの程度下回った。月間全体では、前年をかなりの程度下回り、平年を大幅に下回った。</p> <p>価格は、前月の品薄による高値の影響が残るスタートとなったが、入荷量の増加に伴って旬を追うごとに下落した。月間全体では前年をやや上回り、平年をわずかに上回った。</p>
	にんじん 	<p>長崎産と和歌山産が主体となる入荷であった。徳島産や九州産は上旬早々に切り上がり、長崎産と兵庫産も前進出荷で下旬には入荷量が減り月内で切り上がった。北海道産の入荷が下旬に開始したが、細物が多くMS中心となり、入荷量が少ない状況に拍車をかけた。国産の入荷量が少ない分、太いサイズの引き合いが強まり、輸入の中国産の入荷が増え、月間では前年の1.5倍以上となった。月間全体では前年をかなりの程度下回り、平年をかなり大きく下回った。</p> <p>入荷が不安定な上に細物が多かったことにより、L・2Lサイズの引き合いが強まり、高騰していた前月までの影響が残る中、価格は高値で推移した。旬を追うごとに下落傾向も、月間では前年を7割以上上回り、平年を8割以上上回った。</p>
葉茎菜類	はくさい 	<p>長野産が中心となる入荷で、月の前半は茨城産の残量が入荷した。春産地は各地とも単価安から早々に入荷が終了し、長野産は出遅れて月の前半は少ない状況が続いた。中旬以降は増量傾向となったが、月間では前年を大幅に下回った。月間全体では前年をやや下回り、平年をわずかに下回った。</p> <p>価格は、気温高で量販店、加工筋ともに荷動きが悪く、厳しい販売が続いた。全体では旬を追うごとに下落傾向であったが、月間では前年をやや上回り、平年をわずかに上回った。</p>
	キャベツ類 	<p>月の前半は茨城産と愛知産が主体となり、下旬からは夏の主力である群馬産と長野産の入荷がスタートした。茨城産と愛知産は潤沢な入荷が続いたが、長野産は北佐久地区の出荷遅れから少なく、前年の半分程度であった。群馬産は、スタートは前年並みも小玉傾向で入荷量は伸び悩み、前年を大幅に下回った。後続産地の入荷量が少なかったことで下旬には端境が生じた。月間全体では前年をかなり大きく上回り、平年をかなりの程度上回った。</p> <p>価格は前月までの高値の反動で中旬以降に下落し、安値推移となった。月間では前年を大幅に下回り、平年をかなりの程度下回った。</p>
	ほうれんそう 	<p>岐阜産が中心となる入荷であった。土壌消毒などの作業の遅れから入荷量は伸び悩んだ。特に上旬の入荷量が少なく、前年を大幅に下回った。月間では前年をやや下回り、平年をかなりの程度下回った。</p> <p>野菜全体の高値の影響もあり、入荷量が伸びない中でも価格も伸び悩んだ。月間では前年並みで、平年をわずかに上回った。</p>
	ねぎ（白ねぎ） 	<p>茨城産と鳥取産が主体となる入荷であった。両産地とも不作で産地出荷量が少なく、入荷量は全旬とも伸び悩んだ。鳥取産は旬を追うごとに微増傾向も、月間では前年を大幅に下回り、茨城産も月間では下回った。</p> <p>気温高から需要が伸びず販売には苦戦した。価格も全旬とも伸び悩み、月間では前年をかなり下回った。</p>
	ねぎ（青ねぎ） 	<p>徳島産が中心となり、高知産や近隣の大阪産、奈良産などの入荷もあった。天候不順の影響から産地出荷量は伸び悩み、全旬とも入荷量が少ない状況が続いた。</p> <p>入荷量が伸び悩む中でも末端の荷動きは鈍く、価格は旬を追うごとに下落傾向となり、月間では前年並みであった。</p>
レタス類 	<p>玉レタスは長野産が中心となる入荷であった。端境となり産地出荷量は伸び悩んだが、加工筋の契約などがあり、月間の入荷量は前年並みとなった。サニーレタスとリーフレタスも共に長野産の入荷であったが、端境期で産地出荷量は伸び悩み、全旬を通じて入荷量が少ない状況が続いた。レタス類全体では月間で前年をやや下回り、平年をかなり大きく下回った。</p> <p>玉レタス、サニーレタスは量販店からの引き合いが弱く、販売には苦戦し単価安での推移となった。リーフレタスも引き合いが弱く業務用関係からも発注が少なかったことから、入荷量は少ない状況が続いた。レタス類全体では月間で前年をかなりの程度下回り、平年をやや下回った。</p>	

果菜類	きゅうり 	<p>月の前半は宮崎産や高知産が主体となり、中旬以降は後続の福島産が主体となった。宮崎産は前進気味で切り上がり早く、下旬には前年の半分以下の入荷量となった。群馬産は天候不順の影響により出遅れて入荷量が少なく、月間では前年の2割程度であった。東北各産地は順調で、月間全体では前年、平年ともやや下回った。</p> <p>量販店の売場が狭く、引き合いも弱く販売には苦戦した。価格は旬を追うごとに下落し、月間では前年を大幅に下回り、平年をかなりの程度下回った。</p>
	なす 	<p>千両系は大阪産と高知産が主体となり、長なすは福岡産と熊本産が主体となる入荷があった。月の前半は天候不順で産地出荷量は伸び悩み、入荷量も伸びなかったが、中旬以降に気温が上昇し急増した。各産地とも作の終盤で下旬には入荷減となり、月間全体では前年並みとなり、平年をやや上回った。</p> <p>価格は生産コスト高の影響もあり、野菜全体の高値傾向から上旬は高値を維持していたが、入荷量の増加につれ旬を追うごとに下落した。しかし月間では前年をやや上回り、平年をかなりの程度上回った。</p>
	トマト 	<p>愛知産を中心に熊本産や九州各産地などの入荷があり、また後続の石川産の入荷も始まった。愛知産や熊本産の無加温ハウスのもので、生育遅れから前月出荷予定だったものがずれ込み、中旬以降に集中して入荷が増加した。月間では愛知産は前年をやや上回り、熊本産も前年を上回った。月間全体では前年並みとなり、平年をやや上回った。</p> <p>価格は前月からの高値の影響が残り、中旬以降の増量で下旬には下落したが、月間では前年、平年ともかなり大きく上回った。</p>
	ピーマン 	<p>宮崎産と高知産が主体となる入荷であった。生育期の気温が低かったことにより、夏秋産地は出遅れ気味であったが、秋冬産地の残量入荷があった。月間全体では前年、平年とも大幅に上回った。価格は、前年をやや下回り、平年をわずかに上回った。</p>
土物類	さといも 	<p>鹿児島産の入荷があったが、降雨の影響で1週間ほど出荷が止まっていた時期もあり、入荷量は伸び悩んだ。国産が少なく、輸入の中国産が主体となり、上中旬は前年を大きく上回った。月間全体では前年をわずかに上回り、平年を4割近く下回った。</p> <p>価格はさといも自体の引き合いが弱く、入荷量が少ない中でも伸び悩んだが、前年をかなりの程度下回り、平年を大幅に上回った。</p>
	ばれいしょ 	<p>丸芋は長崎産が主体となり、後続の茨城産の入荷が中旬以降にスタートした。長崎産は作柄が悪く玉つきが少なく大玉傾向で、降雨の影響による腐敗も出たため産地出荷量が激減し、月間では前年を大幅に下回る入荷量となった。切り上がりも早く、中旬から下旬にかけては端境となり、月間全体でも前年をかなり下回った。メークインも長崎産が中心となる入荷で、小玉傾向であったが農協出荷の物が計画的であったことから安定的な入荷となり、月間では前年を上回った。月間全体では前年を大幅に上回った。ばれいしょ全体では月間で、前年、平年とも大幅に下回った。</p> <p>価格は丸芋、メークインとも高値続きの影響が残る中、品薄と先の見通しが良くないことから全旬を通じて高値で推移した。月間では前年の2倍以上上回り、平年を8割以上上回った。</p>
	たまねぎ 	<p>兵庫産を中心として佐賀産の残量入荷などがあった。佐賀産は上旬までの入荷量は多かったが、中旬以降に切り上がってほとんど入荷がなかった。兵庫産は早生種から中生種への切り替えが進み、旬を追うごとに入荷量が増え、月間では前年をやや上回った。大阪産も入荷があったが作付け減少に加えて前進傾向で切り上がり早く、月間では前年の半分程度の入荷量であった。月間全体では前年をかなりの程度下回り、平年並みとなった。</p> <p>価格は、前月までの品薄による単価高の影響が残る中、佐賀産の早期切り上がりから引き合いが強まり、旬を追うごとに上伸した。月間では前年を7割以上上回り、平年を4割以上上回った。</p>

(執筆者：東果大阪株式会社 新開 茂樹)

(4) 首都圏の需要を中心とした8月の見直し

主力産地の北海道は5月以降寒暖差が大きかったとされるが、ここ数年見舞われた極端な干ばつ、豪雨、高温が続いたことに比べると、本年は6月まで安定した天候である。前年は、猛暑の影響が8月下旬以降に大幅な減収となって現れたが、本年8月の東北産や北海道産の出荷は前年を上回ると予想される。

梅雨入りが大幅に遅れて高原野菜が順調に入荷し、価格は4～5月の高値の反動もあって6月後半はやや低迷したものの、平年並みの落ち着いた推移が予想される。

7月の価格が伸び悩むと、農家の出荷が消極的な対応になることが不安視される一方、7月初旬のこれはきゅうりの価格が急騰し、西日本の品不足から東京市場への発注量が増えたことによるものとされる。前年比で作付けは減少しており、市場にものが溢れるといった期間は一時的である可能性もあり、それだけ野菜の供給体制が脆弱になってきているといえる。



根菜類

だいこんは、北海道産（留寿都）の道央地域の作付けは前年比1%程度減少している。前年は猛暑と干ばつの影響により、全減や半作になった圃場があるなど収量は半減した。夜温が25度以下に下がらなかったことが影響し、冷涼作物のだいこんは品種の力だけでは対応できない。現状までは前年よりも順調に出荷できており、7～8月は前年を上回り、安定したペースで9月まで出荷が続くと予想される。北海道産（標茶）の道東の産地は干ばつが続いており、生育は遅れている。7月15日ごろから出荷が始まり、例年通りであればすぐにピークとなって9月まで続くと予想される。一方、サイズはMに近いLが中心となり、出荷量は平年を下回る可能性もある。

にんじんは、北海道産が7月22日から出荷開始見込みで、ほぼ例年どおりの計画である。開始と同時にピークとなり10月中旬まで続くと予想される。8月は、猛暑の影響により不作であった前年を上回る出荷が予想される。青森

産の出荷は、例年より遅い積雪となった影響により例年より遅れ、7月中下旬がピークで8月には終盤を迎える。8月は上旬に市場価格を見ながらの出荷と予想される。



葉茎菜類

キャベツは、群馬産の生育は順調で、7～8月と徐々に増え、9月にピークが予想される。前年は猛暑であったが、例年どおりの出荷であり、今年も前年並みが予想される。

岩手産は、干ばつが続いた影響により、生育は5～7日程度の遅れとなっている。通常は7月上旬には本格的に増えて、10月末ごろまでほぼ一定のペースで出荷されることになる。当面は雨待ちで、現状はやや小ぶりである。生育そのものは問題ないため、雨が降ると例年並みに回復すると予想される。

はくさいは、長野産が春はくさいの終盤を迎えており、7～8月は6月の3分の1に出荷が減る見込み。6月下旬からの雨がやや心配ではあるが、例年どおりの展開となれば9月中旬に再び増える見込みである。前年の8月は例年並みの出荷であったが、9～10月の秋作は猛暑の影響を受け出荷が少なくなった。群馬産は、前年は梅雨明け後の高温障害から50%の出荷減であった。例年7月20日から9月中旬までは出荷の底となるが、9月下旬から再び増える見込みである。作付けは例年並みであり、気象の影響がなければ前年を上回る出荷が予想される。

ほうれんそうは、群馬産の雨よけ物が平準ペースで出荷されるが、8月下旬には減少する見込みである。岩手産の出荷は、前年を上回っているが、前年は暑さの影響により22年比で80%程度であった。8月中旬以降から出荷が増え始め、少なかった前年を上回ると予想される。岐阜産は5月の低温とその後の天候不順の影響により平年を下回る出荷となっている。7月の回復は難しく、8月についても天候次第である。例年7～8月は少なく、9月下旬から回復する。前年は猛暑の影響で22年比80～90%の出荷であったため、前年を上回る可能性がある一方、作付けは前年の95%と減って

いる。栃木産は、現状までは順調に出荷されている。前年は8月中旬以降から減少し、10月いっぱいまで回復が遅れたものの、7月までが好調であったため全体的な減収はなかった。

ねぎは、茨城産の出荷は順調に進んでおり、7月に入りピークを超え8月中旬以降には減少してくる見込みである。出荷量としては例年並みと予想される。青森産は、ハウス物が開始しているが、露地物の早出し物は7月10日過ぎから始まり、7月末から8月の盆前がピークを迎える見込みである。6月の干ばつの影響により葉先が黄変している物があるが、出荷への影響は少なく、8月の盆明けに早出し物の残り、遅植え物が始まる。北海道産の露地物は6月末から始まったが、前年より早く、当面のピークは8月の盆明けから9月いっぱい、出荷は11月初めごろまでと予想される。作付けは微増の見込みである。

レタスは、長野産の生育は順調で、現在標高1000メートル地帯の物の出荷である。7月いっぱい、標高1300メートル地帯の出荷となる。今後、梅雨明けが早まれば、7月中旬にピークがあり、8月はそのまま横ばいの見込みである。群馬産は出荷量の調整を検討している。7月出荷分については、作付けを減らしていた。8月もほぼ同じペースで、平年並みの出荷を予想している。

果菜類



きゅうりは、福島産はハウス物中心であったが、露地物も出始めてきた。引き続きハウス物が中心であるが、8月に入り露地物も増えて来る。露地物は高温と乾燥続きで遅れていたが、6月下旬後半の降雨により生育は順調で7月下旬から8月がピークとなる見込みである。作付けは前年の80～90%と減少している。前年の8月は22年並みであり、9月から露地物が減少した。岩手産は露地物が増えてきて、ハウス物ともに生育順調である。8月は露地物が中心になるが、作付けは若干減少している。前年は盆明けから花落ちするなどして出荷量が減少したが、今年は前年を上回ると予想される。

なすは、栃木産の出荷は例年並みに増えてきている。出荷のピークは7月15日前後から8月盆前ごろまでの見込みである。仮に気温が涼しくなれば生育に時間がかかり、出荷量は減少する見込みである。前年の猛暑では出荷減の生産者もいれば出荷増の生産者もいた。出荷量の減少は作付けの減少が影響している。今後、天候が安定していれば前年を上回ると予想されるが、作付けの減少が注視される。

トマトは、群馬産の出荷が若干前倒しで、8月上旬にピークが来る見込み。今年の作付けは減少したが、来年以降再び増えて来る見込みである。前年は猛暑の影響により9月に出荷が減少したが、今年は減少しないよう対策を検討している。品種は「りんか」である。青森産の生育は順調で、ピークは7月下旬から8月上旬に来ると予想される。前年は7月の降雨の影響により裂果が発生し、高温で8月中旬から少なくなるなど不作年であったため、今年は前年を上回る出荷が予想される。品種は「りんか409」が半分を占めている。茨城産の抑制物は、平年並みの8月盆明けから出荷開始し、9～10月と本格的に増えて11月下旬には切り上がる見込みである。前年は9月の減収が目立った。作付けは前年比微減である。北海道産のミニトマトは順調で、平年並みの出荷となっている。前年は猛暑の影響により8月下旬から9月は70%台まで出荷が減少した。今年の作付けは横ばいとのことから、前年を上回る出荷になると予想される。

ピーマンは、福島産の露地物が平年より若干早い5月26日から始まった。ハウス物も含めて8月の盆明けごろがピークとなると予想される。前年は猛暑で花落ちの段が発生し、22年比で95%作になった。今年は雨が少ないことから病気が見られ、正品率が低下しているが、梅雨時期には持ち直しそうである。露地物の作付けは前年の90%程度に減少している。岩手産は、ハウス物が中心であるが、今後露地物も増えて7月下旬がピークとなる見込みである。生育は順調で、若干前倒し傾向であるためピークは例年よりなだらかである。前年8月は10～20%減少したが、今年は水不足が懸念材料であるものの、前年を上回る出荷が予想される。

土物類



ばれいしょは、北海道産（今金）の早出し物は例年より若干早めの7月下旬から出荷開始の見込みである。天候は春先が干ばつ、6月は曇天が続き、7月は晴れであった。前年の猛暑の影響は特に9月以降に現れた。例年のピークは10月以降であり、当面8月いっぱいにはマルチ（被覆）物となり、9月には露地物が本格化する見込みである。作付けは微減である。北海道産（芽室）の「とうや」は8月17日から出荷開始の予定で、作付けは横ばいである。「メークイン」の早出し物は8月終盤から始まるが、ほとんどは9月以降の出荷となると予想される。作付けは前年並みで、若干干ばつ傾向であるが、生育はおおむね順調である。北海道産（道央）の「きたあかり」は7月中旬から例年並みに始まる見込みである。

たまねぎは、北海道産（きたみらい）は例年7月には出荷開始となるが、やや早まると予想される。生育は順調で、8月は前年を上回ると予想している。現状の肥大状況は問題ない。兵庫産は平年並みで、大きさも前年より小さめのLサイズ中心である。現状は貯蔵を開始しているが、この冷蔵物は10月初めから出荷開始し、3月までの出荷を目途にしている。7～9月は、農家が乾燥したものと、農協が乾燥貯蔵したものの出荷販売となる。今年は歩留まりが良く、平年並みの出荷が予想される。

その他



ごぼうは、これから中心となる宮崎産・鹿児島産などの九州産は降雨が多く、現状では入荷が滞っている。関東の群馬産は安定しており、相場は堅調の見込みである。今後、青森産（春掘り）の動きが注視される。

かぶは、青森産の産地が干ばつ気味で、生育が緩やかである。播種後の気温が低いことも影響し、出荷は少なめである。今後については、高温と降雨の影響により平年並みに回復してく

ると予想される。8月は前年を上回ると予想しているが、作付けは減少していることが懸念材料である。

こねぎは、福岡産の前年は大雨で減収したが、本年は今のところ生育は順調である。7～8月は例年並みの出荷が予想される。

ブロッコリーは、北海道産の作付けは前年の70%と大幅に減少。当初は遅れたが現状では追いついて、7月10日前後にピークとなる見込みである8月の盆明けに減り始め、10月まで横ばいで推移すると予想される。長野産は例年よりも降霜・ひょう害は少ないが、7月の初めのは霜の影響により減っている。今年は、干ばつの影響により出荷が少なかった前年を上回る可能性が見込まれ、当面の出荷のピークは9月中下旬と予想される。

アスパラガスは、福島産の夏芽（立茎物）が始まったばかりであり、増えて来るのが7月中下旬で、8月にピークとなり、9月に入ると減少し始める見込みである。現状の株の充実度は平年並みである。春芽は前年の天候不順の影響によりやや不作であった。作付けは農家の減少により若干減っている。

かぼちゃは、悪天候の影響により北海道産（きたはるか）の定植が若干遅れ、まだ終わっていないため、出荷開始は早くも8月末からで、共選（共同選果）は9月に入ってからとなる見込みである。作付けは例年並みと予想される。北海道産（新函館）は8月15日ごろから始まり、ピークは9月である。品種は「栗将軍」「栗大将」「みやこ」などで、作付面積は減っているが、生育は順調である。

にがうりは、長崎産は7月上旬後半から中旬前半にピークとなり、8月は終盤となる見込みである。前年は台風接近の情報を受けてビニールをはがすなどの対応をしたことにより、出荷はかなり減少した。作付けは半分以下となっている。

えだまめは、山形産の「だだちゃ豆」は生育

順調で、7月下旬から平年並みでスタートし、8月いっぱいの見込みである。作付けはやや減少している。秋田産は、5～6月の天候推移が、乾燥続きの後に雨が続きといった極端な展開で、草丈が短くなっており、その分やや出荷は早まると予想している。7月下旬に出揃い、8月が出荷のピークとなる見込みである。作付けは減少傾向だが、直近の2～3年は横ばいである。品種は一部「湯あがり娘」などの茶豆系のものもあるが、大半は青豆系である。前年は県北を中心とする豪雨の影響を一部受けて、減収になったが、本年は前年を上回ると予想される。

さやいんげんは、福島産は7月に入った時点で出荷のピーク（7月10日ごろまで）に入り、今後の気温によっては7月いっぱいの見込み。7月の気温が30度を超えると花落ちし、8月の出荷物はなくなる可能性がある。7月に播種したものが9月に出荷開始し、11月中旬まで出荷が続くと予想される。

スイートコーンは、北海道産(芽室)は例年どおりであれば7月下旬から始まり、東京市場にも8月上中旬が出荷のピークとなり、8月いっぱいの見込みである。作付けは青果用として100ヘクタールと例年並みである。北海道産(ようてい)は8月中旬から始まり、8月25日ごろがピークで9月20日ごろに終える見込みである。作付けは前年並み、品種は「恵味」^{めぐみ}「味来」^{みらい}である。前年は高温の影響によりしなびなどが発生し品質が悪かった。また、例年より10日早く切り上がった。北海道産(新函館)は7月末から始まり、8月盆前まで「ゴールドラッシュ」が出荷される見込みである。千葉産は7月5日から始まり、ピークは7月15日～20日で、8月10日には切り上がると予想される。6月中旬の降雨と風により一部倒伏したが大きな心配はなく、作付けは前年を上回っている。

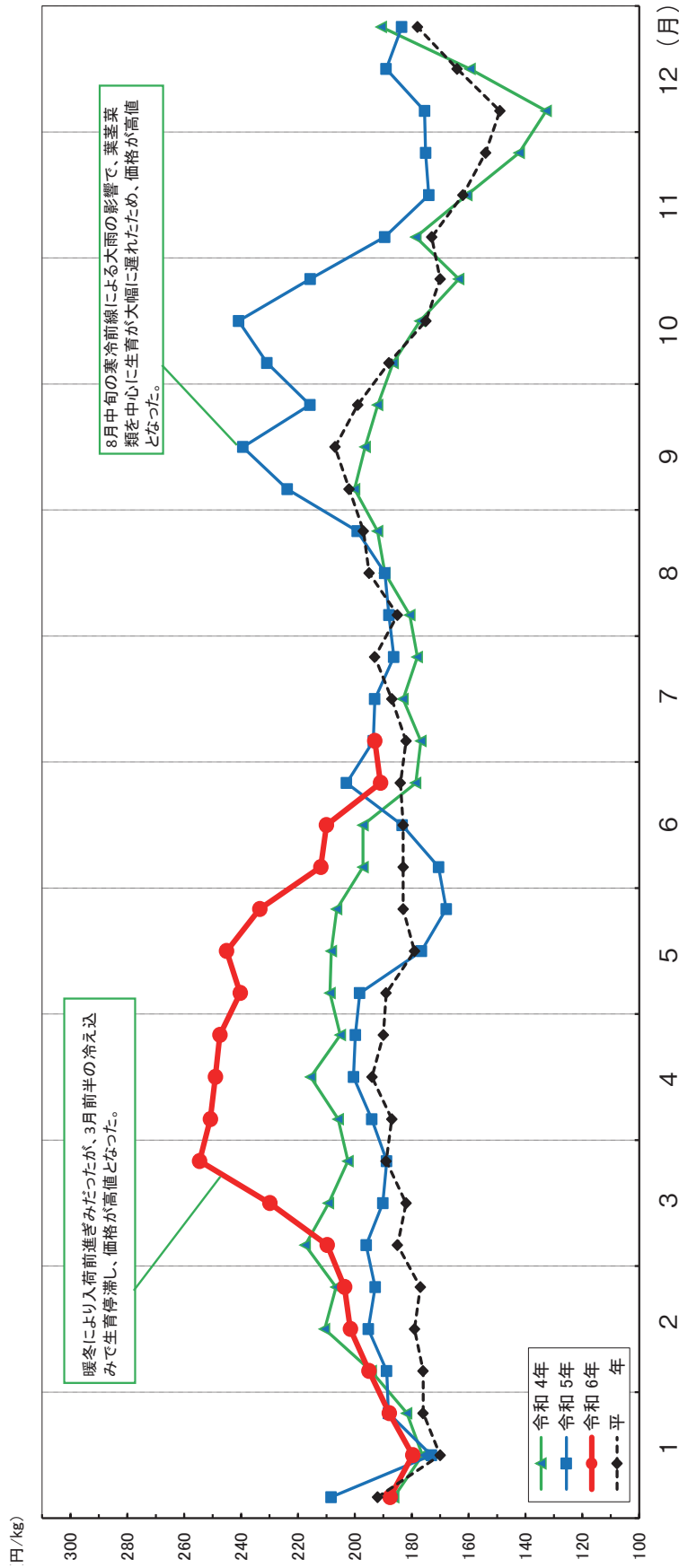
かんしょは、徳島産の個選(個人選果)物が7月初めから、共選物は8日からと平年と変わらない始まりである。出荷量も作付けも前年並みである。

にんにくは、青森産の貯蔵物が始まるのは7月16日からで、9月に入り市場出荷開始の見込みである。一部の収穫後乾燥したものは8月末ごろから出荷開始の見込みである。作柄としては例年並みで、全般的な仕上がりは特別大振りではなく、各等級にばらついている。

メロンは、北海道産の「ルピアレッド」が6月末から始まり、8月の盆前までと予想される。「ピュアラ」は7月初めから9月中旬まで、「レッド01」は8月盆明けから始まり9月下旬いっぱいとは予想される。「レッド113」は9月下旬から11月初めごろまでと予想され、これらの赤肉メロンの作付けは前年並みである。青肉メロンの「らいでんクラウンメロン」は7月初めから11月いっぱいまでであるが、作付けは10ヘクタール減少して前年の80%となっている。北海道の現状までの天候は暑すぎず、特別の気象災害はなく着果は良好である。

(執筆者：千葉県立農業大学校
講師 加藤 宏一)

(参考) 指定野菜の卸売価格の推移 (東京都中央卸売市場)



(単位：円/kg)

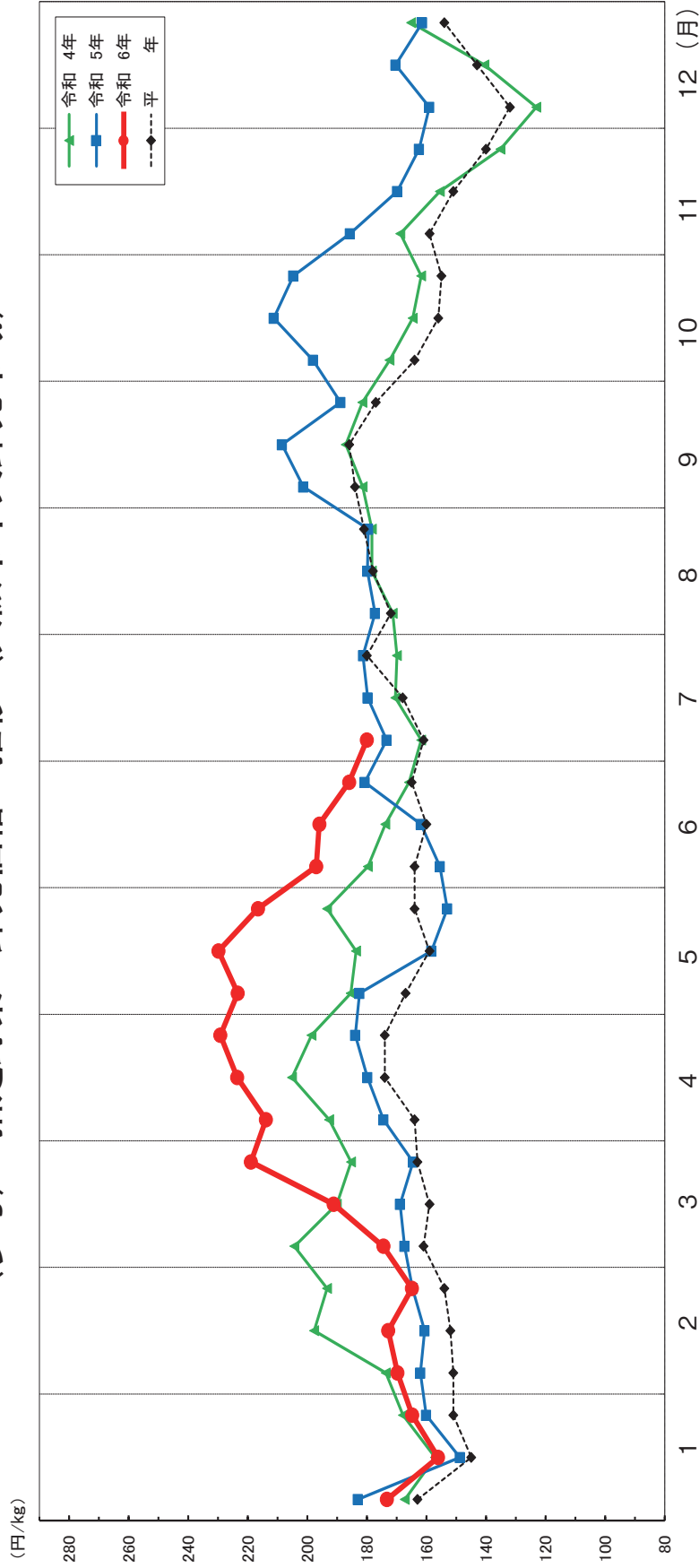
	1月		2月		3月		4月		5月		6月		7月		8月		9月		10月		11月		12月															
	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬														
令和4年	186	176	182	194	211	207	217	209	202	206	216	205	209	208	206	197	197	179	177	183	178	181	189	192	200	196	192	187	177	163	179	161	142	133	160	191		
令和5年	208	173	188	189	195	193	196	190	189	194	200	200	198	177	168	171	183	203	194	193	186	188	189	199	224	239	216	231	241	216	190	174	175	175	189	184		
令和6年	188	180	188	195	202	204	210	230	255	251	249	247	240	245	233	212	210	191	193																			
平	192	170	176	176	179	177	185	182	189	187	194	190	189	179	183	183	183	184	182	187	193	185	195	197	202	207	199	188	175	170	173	162	154	149	164	178		

資料：農林水産省「青果物卸売市場調査」

注1：平年とは、過去5力年（令和元年～令和5年）の旬別価格の平均値である。

注2：豊洲市場、大田市場、豊島市場、淀橋市場の4市場のデータである。

(参考) 指定野菜の卸売価格の推移 (大阪市中央卸売市場)



(単位：円/kg)

	1月		2月		3月		4月		5月		6月		7月		8月		9月		10月		11月		12月														
	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬													
令和4年	167	157	168	174	198	193	204	190	185	193	205	199	185	184	193	180	174	166	162	170	170	171	178	178	181	187	182	172	165	162	169	156	135	123	141	165	
令和5年	183	149	160	162	161	165	167	169	165	174	180	184	182	158	153	155	162	181	173	180	181	177	180	180	201	209	189	198	211	205	186	170	162	159	170	161	
令和6年	173	156	165	170	173	165	174	191	219	214	224	229	233	230	217	197	186	180																			
平年	163	145	151	151	152	154	161	159	163	164	174	174	167	159	164	164	160	165	161	168	180	172	178	181	184	186	177	164	156	155	159	151	140	132	143	154	

資料：農林水産省「青果物卸売市場調査」

注1：平年とは、過去5力年（令和元年～令和5年）の旬別価格の平均値である。

注2：大阪本場及び大阪東部市場のデータである。